

第三十七回 北日本文学賞二次通過

『赤い傘』

原稿用紙換算30枚

ちよつ子 著

天気予報では晴れのはずなのに、午後からは空模様が怪しくなり、夕方から本格的に雨が降り出した。

残業を終えてロッカールームへ行ったが誰もいない。みんな要領よく理由を作って帰ってしまったのだ。外の様子を見ようとブラインドに指を挟み、隙間から通りを見下ろしていたが、麻子はいきなり肩で大きく溜め息をつくと、ロッカーの奥から手探りで傘を取り出した。

太目のU字に曲がった傘の柄がしっくりと手に馴染んでくる。捨てようと思いつつ捨てられずにいた傘だった。奥の方に放り込んだまま、二度と触れまいと誓った傘でもある。

ロッカーの中に傘を入れたことを忘れてしまいたいと思っているのに、記憶の奥へ押し込めることはできても、記憶を消し去ることはできない。忘れたつもりでいても、何かの拍子に心の隙間からぼろりと飛び出してくる。無理やり忘れようとすると、知らず知らずのうちに思いが募って、はじけ出す。

麻子は傘の柄をしっかりと握り締めた。たかが傘ではなにか。思い切った使うことで、過去と決別をし、こだわらずに生きていけるような気がする。

五階のオフィスからエレベーターで下りると、玄関ホールには仕事帰りの人たちが、じつと外を眺めて立っていた。この雨では傘を差しても、地下鉄の入り口に行くまでにはずぶ濡れになってしまうだろう。麻子は手元の傘を恨めしげに眺めた。

行き交う車のテールランプが揺れ、ネオンの点滅が繰り返される。大粒の雨は音を立ててぶつかりガラス面に張り付くと、麻子の前に景色を浮かび上がらせ、歪んで流れ落ちた。

麻子の目の前を真っ赤な傘が通り過ぎて行く。体を緊張が走り、傘の柄を握る手に力がこもった。歪んだ景色の中

に一瞬のうちに消えていった傘を、雑踏の中から探し出そうと目を凝らしている自分に気がついて、麻子ははっとした。

荻原のことは過去と割り切って生きていこうとしているはずなのに、心のどこかでこだわっている。忘れたつもりでいても、ひょんなときに荻原との思い出が飛び出してくるのだ。

強い風にあおられて、木の枝が大きく揺れている。通りを傘も差さずに走り抜けていく人たちの足元のアスファルトに、落ち葉が張り付いているのが見える。麻子の前に広がる厚いガラスを通して、秋の終わりの冷たさが伝わってくるようだった。

麻子が二十五歳のときのことだったので、もう八年前のことになる。

同じビルに勤める荻原と、入社時間や退社時間にエレベーターや玄関で顔を合わせるうちに、挨拶を交わすようになり付き合いはじめた。

何度目のデートのときだっただろう。「部屋でゆっくりしませんか」と誘われた。

荻原のマンションは繁華街から一本裏通りで、会社からは歩いて十分ほどのところにあった。近くのコンビニでワインとチーズなどを買った。

レジに並んでいた荻原がカウンターの湯気が上がっている鍋を覗き込んで、「おでんも買おうか」と、麻子に聞いてきた。いつもとは違う荻原のくだけた言い方に、気恥ずかしい思いがして頬が赤らんだ。一気に二人の距離が接近したような思いがしたのだ。

両手に買い物袋を下げて並んで歩く姿はずっと以前からの恋人同士のようだ。麻子は幸せを実感していた。すれ違う人たちの目にはどんな風に映っているのだろうか、確かめてみたい思いがする。

玄関のドアを開けると、荻原は麻子のために新品のスリッパを出してくれた。荻原の心遣いが嬉しくて、胸が躍った。麻子はしゃがみ込むと、荻原の靴と麻子の靴を並べて揃えた。二人の靴がまるで似合いのカップルのように麻子の目に映る。

背を向けていても、荻原のじつと見つめている熱い視線を麻子は感じ取っていた。これからの時間を思うと、期待と不安で息が詰まりそうになる。

何気なく横を見ると、下駄箱の横に男住まいには不釣合いな、真赤な傘が立てかけてあった。サテンのような光沢のある生地で、柄が太目の婦人物の傘だった。

麻子は誰の傘だろうかと、気になった。

「ああ……、捨てようと思っていたんだが、つい忘れて」
麻子が傘を見ているのに気がつくのと、荻原はなんでもないことのように軽く言った。

「離婚した妻が、置いて言ったんだ」

荻原は麻子より十歳も年上である。過去に色々なことがあっただろうと寛容に聞いてはいたが、想像もしなかった状況に切なさや澀のようになり心の底に溜まっていく。別れた奥さんへの嫉妬なのか、結婚していたことを知らされていなかったことへの、不信感なのか。自分の心の中を計り知ることができずにいたが、麻子は改めて赤い傘を見ることができない。

「彼女は再婚したんだ」

麻子の気持ちを考えて、安心させようとして言ったのだらう。荻原の気遣いを感じられたが、割り切れない思いが募って涙が溢れそうになる。過去のことなどどうでも良いと思いつつも、荻原をまともに見ることができずに、視線をはぐらかした。動揺しているのを感じられるのが怖かったのだ。

「子供には二度と会わない約束をした。父親が二人になったら混乱するって言われて……」

糊の効いたワイシャツとスーツをすっきりと着こなしている荻原からは想像することもできない、いつもとは違う父親の顔が覗いた。苦悩する荻原に、麻子の立入ることのできない距離を感じていた。

「ひどい雨。ずぶ濡れになってしまっわ」

聞き覚えのある声に振り向くと、職場の後輩の理絵が立っていた。

「小降りになるまで、食事でもしましょうよ」

人懐っこい顔で微笑みかけてくる。理絵の笑顔には心が癒されるような不思議な魅力がある。理絵に誘われるまま、一階のレストランに入り隅の窓辺の席に座った。雨宿りの客が多いのか、店内はいつになく混んでいる。

「これからデートなの」

「と言いなながら理絵は携帯電話をテーブルの上に置いた。」

「雨がひどいので、彼、迎えにきてくれることになってい

るの」

理絵は携帯電話を開き、時間を確かめながら言った。

「かれ？」

理絵は一年前に子供を引き取って離婚をしている。子供を育てながら働くには慣れた仕事が良いと、職場に戻ってきたのだ。

「付き合っている人よ」

黒目がちの大きな目をくりくりさせて、臆面もなく言った。

「子供さんは？ 保育所、いいの？」

「親に頼んだわ。子供たち、今日は実家に泊まるの」

何の屈託もない、明るく弾んだ声で言った。

理絵は快活であっけらかんとしている。少し調子がいいが、さばさばとしていて憎めないところがある。三歳しか違わないとは思えないほど、チャームिंगで若々しく見える。

ウエイトレスが来ると理絵はメニューを見てカニ雑炊を頼んだ。麻子はおながが空いていたが、家に帰ったら母が食事を用意してくれている。軽くすまそうと麻子も雑炊を頼んだ。

「先輩はどうして結婚しないんですか」

届けられた雑炊をスプーンで掬って息をかけて冷ましなから、理絵は遠慮もなく言った。

「しないんじゃないわ、できなかつたのよ」

麻子の強い口調に、理絵は驚きの表情を見せた。

雑炊にスプーンを入れたり出したり、かき混ぜながら、わずかに湯気が揺れる雑炊を見つめ、麻子はさりげなく問い返した。

「どうして、離婚したの？」と。

理絵は掬い上げた雑炊をそのままにして、首をすくめて答えた。

「彼のが好きになつたからよ」

理絵は雑炊が熱かつたのか、はあはあと息を吹きかけた。

「先輩は、荻原さんとどうして結婚しなかつたんですか」

理絵は思い付いたことをすぐに口にす。懲りずにまた聞いてきた。遠慮と言うことを知らないのだ。

「会社の中で、知らない人なんかいませんよ。結婚するらしいと聞いていたのに、荻原さんの会社が引越して、それつきりなので、どうしたんだろうと噂をしていました」「結婚なんて、そんなつもりはないわ」

理絵に荻原とのことを言われて、麻子は動揺していた。荻原の会社は集合ビルが手狭になったため、自社ビルを建てて、引越して行ったのだ。荻原とは仕事が一段落したら結婚する約束をしていたが、会社の人で荻原とのことを聞いてくる人などいなかったので、誰も知らないと思っていた。

「高校の同級生で、大学を卒業したら結婚しよう」と約束していた人がいたの」

荻原のことに触れられたくなくて話をはぐらかし、麻子は今まで誰にも言ったことがない、初恋のことを話した。理絵ならどうするのだろうか、聞いてみたい気持ちにもなっていた。

「就職したら結婚しよう」と二人で約束していたの。二人だけの内緒だったはずなのに、親に知れて……、結婚なんて早すぎるって反対されたわ。いつの間にか連絡が取れなくなって……、それっきり」

麻子は雑炊をすすった。冷えてねばねばとした感触が口の中に広がり、彼との後味の悪い思いがよみがえってきた。

「親の言うことなんか、気にしちゃだめ。一緒に住むと良かったのよ」

理絵は考える間もなく、あっさりと答えた。

「親は関係ないの？」

「そうよ。親の思い通りに生きるなんて無理なことよ。自分の果たせなかつた夢を押し付けてくるだけなんだから」

関係ないわよ、と明るく笑った。

麻子の周りには、家賃が半分ですむから経済的と、学生同士で一緒に住んでいるカップルがたくさんいた。麻子は親元から大学に通っていたので、家を出て彼と一緒に住むなんてことは考えられなかった。理絵ならそんなことなどおかまえ無しに、好きな人と一緒に住みだすのかもしれない。

「理絵さんの生き方、羨ましいわ」

理絵のように生きることができたとしたら、麻子は違う人生を歩んでいたような気がする。過去に戻って人生をやり直すことができたなら、麻子はどんな生き方をするのだろうか。荻原と結婚をすることができるのだろうか。

窓の外は風がやみ静かに雨が降っている。麻子は向かいに座っている理絵のことを忘れて、窓の外を眺めた。窓ガラスの幾筋もの雨粒が重なり連なって目の前を流れ落ちていく。

歩道を色とりどりの傘が通り過ぎる。荻原と別れたのもこんな雨の日だった。麻子は通り過ぎていく傘の中から、荻原を探し出そうとしている自分に気づき、切なくなった。

昨夜、遅い晩御飯をダイニングキッチンで食べているとき、麻子の向かい側に母が腰掛けて、珍しく話し掛けてきた。

「病院にいったら、白内障だと言われたよ。老後のことを考えると、不安になってね」

母の顔をちらっと見ただけで、麻子は黙って食事を続けた。

「結婚しないのかい。」

「たまりかねたように母は付け加えた。」

「いつまでも家にいると、肩身が狭いんだよ。世間体も悪いし」

母らしい言い方だと思った。世間体とか近所がとか、麻子は何かあるたびに言われ続けてきた。母のものさしは世間の枠からしか推し量ることしかできない。母の中には価値基準が存在しないのだ。

「そうね。アパートでも借りるわ」

「そんなことではないんだ。早く結婚して幸せになってほしいんだよ」

「そんな相手、いないわよ」

母のくどくどとした言い方に、麻子は煩わしくなつて、鋭い視線を向けた。母はおろおろとして麻子から視線をはずすと、伺うようにリビングにいる父を見た。麻子はいい加減にしてよ、仕事で疲れているのに、と思いつながら母の背をにらみつけた。母は父の言葉を代弁しているだけなのだ。何の考えもない、母の主体性のない生き方にうんざりしてくる。

母はいつもそうだった。父のすることに反対ばかりしているのに、自分の意見をもってはいない。父の顔色を見て、結局は従ってしまう。幼かった麻子を相手に不満を並べ立て、最後には自分さえ我慢すれば上手くいくんだと諦めた。麻子は母の愚痴を聞いて育ったような気がする。

食事を終えるとコーヒーをいれ、父と向かい合ってソファに腰掛けた。父は新聞を読みながら、タバコをくゆらせている。母は台所で、麻子の食べ終えた食器を洗っていた。

「いい人がいるんだが、見合いしてみないか」

タバコをのみ消すと、たまたま思い出したかのように言った。いつもの父らしくなく、やさしい口調だった。

「取引先の息子さんと再婚なんだ。子供はいない。一度会って見ないか」

「コーヒーを飲みながら、そ知らぬ振りをして聞いていたが、父の口から出た「再婚」の言葉に、怒りで顔が紅潮する。いまさら何を言っているのよ」と麻子は爆發しそうになる感情をかるうじて抑えた。

「結婚する気はないわ」

冷やかに言っていると、麻子は飲みかけのコーヒーをそのままにして自分の部屋に戻った。

「あまり評判、よくなかったですものね」

不意に理絵が話し掛けてきた。何のことなのか、聞こうと思ったとき、テーブルの上の携帯電話がぶるぶると音を立てて震えた。

「ごめんなさい。彼が来たみたい」

理絵は携帯電話を開けると、メールを確認して立ち上がった。麻子はそばに置かれた伝票を摘み、理絵につられて腰を浮かせた。

「いいんですか。ごちそうさま」と言つと、理絵は一目散でレストランを出て行った。

おごるつもりなどなかったのに、伝票を持ったので勘違いをしたのだろう。麻子は苦笑いしながら、おもむろに座りなおすと、ウエイトレスを呼んで「コーヒーを頼んだ。」

「どうして結婚しないんですか」

理絵の言葉が思い出されて、笑いがこみ上げてくる。なんと、齒に衣着せない言い方だろう。理絵らしいといえばそれまでだが、デリカシーのかけらも感じられない。

荻原と別れてからは親しくお付き合いをした男性はいない。理絵ならあっけらかんとして、「恋人いない歴、八年」そんな言い方をするのだろうか。

結婚が幸せの全てのように思っていた時期もあったが、いつからか結婚に夢をもてなくなっていた。結婚だけが人生ではない、最近は結婚をしない女性が増えているのだ。結婚なんかどうでもいいではないか、と思っているはずなのに、麻子は荻原のことを引きずって、いまだにもやもやとした思いでいる。

いまさらどうにもならないという諦めの気持ちと、過去

にこだわりながら生きている自分自身への苛立ちが遣り切れなくて溜め息をついた時、麻子の前にコーヒーが置かれた。

昨夜の飲みかけのコーヒーと重なってはつとしたが、ウイトレスは麻子に何の関心も示さずに戻っていった。

麻子はコーヒーを見つめた。荻原とのはじめてのデートもこの店だった。

「このカプチーノは美味しいよ」

と荻原に勧められて飲んだ。苦みを効かせたエスプリッソにふわふわに泡立てられたミルクがまるやかだった。荻原とのほろ苦い思い出がコーヒーの香と重なる。

初デートをしてから数カ月後の日曜日、荻原が結婚の申し込みに来た。

朝早くから麻子は母と荻原をもてなすための料理づくりで忙しかった。母には折に触れて荻原のことを話していた。離婚をしていることも、養育費を払っている身であることも。

父は朝から不機嫌だったが、娘を嫁に出すどこの父親にもある戸惑いだと思っ、麻子はさほど気にはしていなかった。

約束の時間ちょうどにチャイムがなった。麻子が出迎える床の間に荻原を通すと、父は既に上座に座っていた。着物に着替え正座している父は、いつも以上に硬い表情をしている。

「麻子さんと結婚させてください」

母が座るのを待つて荻原は頭を下げた。

「離婚したと聞いているが、何が原因なのかね」

父はありきたりの世間話をすることもなく、麻子の気持ちを見無視して切り出した。こんなとき聞かなくてもいいではないか、と父の不躰な質問に腹立たしく思った。でも、麻子にとっても、聞きたくても聞けずじまいだったのだ。麻子にははらはらとしながらも荻原の言葉に耳を傾けていた。

「性格の不一致です」

正面を見据えると、荻原は毅然と答えた。

「そんなことは理由にはならないだろう。人それぞれ性格が違うし、足りない部分を補うのが夫婦ではないか」

父は即座に言った。荻原は真赤になって口ごもったが、どうにかこの場を収めたいと思ったのだろう。

「麻子さんを幸せにします。結婚を許してください」

荻原は両手を畳につけて、頭を深々と下げた。

どうしてはつきりと言ってくれないのだろうか。言われないような真実が隠されているとでも言うのか。離婚の本当の理由はなんだったのか、はぐらかされた思いがして、麻子はある気にとられた。荻原は話す必要がないと思っっているのだろうか。二人のこれからにとって、避けて通つてはいけないことのように思われる。

父は先妻と子供のことについてしつこいほどの質問をしたが、荻原は口をつぐんでなにも話そうとはしない。

「君のような男は、信用できない。麻子を幸せにはできないだろう」

荻原は無言のまま下を向いていた。

「君からは誠実さが伝わっては来ない。帰ってくれ」

身の置き所のない思いで、父と荻原の様子を見ていたが、父の言葉に全身の血が引いていく思いがした。

これ以上の長居は無用と思つたのだろう、荻原は「失礼します」とだけ言うと、会釈をして立ち上がった。玄関へ向かう荻原を麻子は追つたが、話し掛ける言葉が浮かばない。玄関で靴をはいた荻原と上がり框に突っ立ったままの麻子が見つめ合った。

ひどい言い方ではあつたが、父の言うことが分かるだけに、麻子は黙って荻原を見送ることしかできなかった。

何年前に離婚したのか、子供は何歳になつているのか。

荻原からは何も知らされていなかったし、聞いてはいけないことのように思つていた。麻子は悶々とした思いで自分の部屋に閉じこもつた。

父は設計事務所を経営している。製図用紙に線を引くように、麻子の人生も思い通りにしようとしていたのだ。父の設計図には十歳も年上の離婚した男と娘が結婚することなど、描かれていなかったのだろう。

来春には結婚をしたいと思つていただけに、信じられない結末だった。

どれくらいの間泣いていただろうか。部屋の中は薄暗くなっている。

二人の結婚生活にとって、離婚した理由を知ることには本当に必要なことなのだろうか。荻原と結婚できるのなら、過去のことにとだわる必要などないように思われる。麻子が好きになつたのは離婚と言う過去を背負つた荻原なのだ。過去のない人間なんか、この世には存在しない。麻子にも

内緒にしておきたい過去がある。荻原が話したくないのなら、聞かなくなつて良いではないか。

今を生きている荻原を好きになつたのだと気がつくとも、麻子は両親の止めるのも聞かずに家を飛び出した。夜気は今にも雨が振り出しそうなほど、どんよりと湿り気をおびていた。

家の近くでタクシーを拾うと荻原のマンションに向かった。今すぐに会いたいと気が急ぐが、裏腹に足が前に進まない。タクシーを降りると麻子は心を落ち着かせようと、マンションの前を行ったりきたりして、時間を過ごした。

玄関前でぐずぐずとしていると、マンションの住人らしい人がきて、押されるようにエントランスホールに入った。その人が入り口近くの機械に向かつて暗証番号をプッシュし、カギをさしこむと麻子の前の施錠されていたドアが音もなく開いた。

その人にはかまわず麻子は前へ進んだ。廊下の奥のエレベーターまで急ぎ足で進み、止まっていたエレベーターに飛び乗った。荻原の部屋の階まで上がると、麻子は部屋の前で立ち止まった。

カギを持っていないし、チャイムを鳴らすだけの勇気がない。そつとノブを握ってみた。開けておいてくれたのか、忘れたのか、カギは掛けられていなかった。

部屋の中は暗く、明かりもつけずに荻原はリビングのソファーに横になつていた。息苦しいほどの、タバコとアルコールの臭いがする。そつと部屋の中に入ると、麻子は空気を入れ替えるために窓を開けた。外はくすぶつたように霧がかかり、街灯がほのかに光を放っていた。

荻原はいびきをかいて寝入っている。ためらうこともなく、荻原にすがつて泣くことができたなら、どんなにか気持ちになるだろう。近づくこともできずに、麻子は窓辺に立つたまま、じつと荻原を見つめていた。

食卓テーブルの上にはビールの空き缶とコンビに弁当が食べ散らかされ、上着が椅子の背からずり落ちそつになつている。いつもはこんなに散らかす人ではない。

床に落ちている買い物袋を拾い上げると、麻子はテーブルの上を片付け始めた。

家にはもう帰るまい。結婚式などしなくてもいい。荻原は再婚なのだし、式にこだわることなどないだろう。一緒にさえ居られるといいのだ。麻子は自分の気持ちを反芻するように確かめた。

薄明かりの中で、音を立てないように片付けていたが、最後の空き缶を握ったとき手から滑り落ち、大きな音を立ててフローリングの上を転がった。

荻原は目を覚ました。黙って入ったことを荻原に咎められるのではないかと心配したが、じつと見つめられただけだった。荻原は麻子が来ることを待っていたかのように、おもむろに立ち上がるとリビングの電気をつけ、冷蔵庫からワインを出した。荻原は憔悴したように、とろんとした充血した目をしている。

「二人の未来に乾杯しよう」

ろれつの回らない口で言いながら、ふらふらとした足取りで、サイドボードからグラスを二つ取り出した。荻原はテーブルに寄りかかるようにして、心もとない手つきでワインを開けると、なみなみと注ぎいれ、グラスを麻子に手渡した。

「乾杯」と麻子のグラスに軽く触れると、荻原は一気に飲み干した。

「子供ができたらどうするだつて？ 余計なお世話さ……。養育費くらい払えるさ」

荻原はボトルを引き寄せると、どぼどぼと溢れさせながらワインを入れた。

「どうせ俺なんか、だめな人間さ。麻子を幸せになんかできないよ」

なあ、あさこさん、と悲しげに言うのと、口角を歪ませた。そんなこと思っていないと、麻子は頭を何度も横に振った。

「頑固親父が……。偉そうに……」

荻原は吐き捨てるように言うと、テーブルの上の物を払いのけた。麻子の前をグラスが舞い、ワインが血飛沫のように散った。グラスの割れる音に、麻子は耳を覆ってその場に立ち尽くした。

もしも、暖かい大きな手で抱きすくめてくれたなら、全てを荻原にゆだねようと決心していたのに、荒れる荻原の姿に気持ちが悪えていく。足元に落ちている割れたグラスのかげらを拾おうと思うが、凍りついたように体が動かなかった。

家には帰るつもりはない、ここに一緒に居させてほしい。結婚したいのだ。そう伝えたら、行き場のない荻原の苛立ちが納まるのではないかと思うのだが、言葉が上手く出てこない。

緩慢な動きで荻原が立ち上がると、いきなり麻子を抱き寄せ、キスをしてきた。荒々しい唇の動きに、前歯がぶつかり合う音がする。麻子はされるがままに身を任せていたが、プライドを傷つけられた荻原の心は納まりそうになかった。

甘味なはずの抱擁が屈辱的で苦痛でしかない。肌と肌が触れ合っているのに、一人でいるときよりも孤独を感じる。柔らかな皮膚を通して、とげとげとした荻原の感情が伝わってきた。

荻原の腕の中にいて、麻子は安らぎを得ることができない。力いっぱい抱きしめられている指先からは愛が伝わってこなかった。麻子はいたぶられてはいるだけなのだ。もうここには居られない。自分の居場所がここにはないのだ。荻原は麻子のことを許してはくれないだろう。荻原の愛が憎しみに変貌したことを感じ取って、耐えきれずに涙が流れ落ちた。

窓の外が明るくなり出している。

荻原が麻子から離れたときを見計らって、「いったん降ります」

と取り繕うと、麻子は帰り支度をはじめた。身繕いをはじめた麻子を見ても、荻原は何も言わなかったが、玄関まで送ってくれて、雨を気遣って傘を手渡してくれた。

雨は静かに降っていた。朝早いのに、すでに地下鉄のホームは通勤、通学の人たちで混み合っていた。

電車の中は学生たちのおしゃべりで活気がみなぎっている。麻子のがやがやとした中にいて、心が安らぐのを感じていた。ほっとして足元を見ると、傘の滴がパンプスの中に流れ込んでいた。急いで傘を持ち上げて、麻子は愕然とした。これは捨てるはずの傘。

麻子は傘を見つめたまま、息を呑んだ。荻原から傘を受け取ったときは、赤い傘であることに気づかずになっていたのだ。

あれから荻原とは会っていない。

ロッカーを開けるたび、傘を借りた日のことが熱い痛みを伴って思い出されたが、いつか返そうと奥のほうへ押し込んでいた。

別れを決定付けた傘は、荻原を愛した証であり、諦めきれない未練であり、忘れられない過去でもある。

荻原は先妻の置いていった傘を捨てられずにいるような、優柔不断な人だった。麻子はそんな決断のなさを優しさ

勘違いしていたような気がする。そして、麻子自身もその傘をいまだに捨てられずにいる。そんな似たもの同士が惹かれあっていたのだろうか。ずっと、結婚できないのは両親のせいだと責め続けてきたが、もしかしたら、父は荻原の人間性を見通していたのかもしれない。離婚歴があることも、年齢が開いていることも結婚の障害だなどは、父は考えてはいなかったような気がしてくる。

帰り際の理絵の言葉が思い出された。

「あまり評判、よくなかったですものね」

理絵は何を言おうとしていたのだろう。荻原のことを言っていたのではないだろうか。荻原の評判など気にしたことなどなかったが、周りではそんな噂をしていたのかもしれない。

結婚しなくて良かったのだと、なぜか麻子はほっとしている。理絵の言葉に救われたような気がしてくるのだ。荻原と結婚していたら、なぜ、あんな人と、と陰口を言われていたように思う。

今まで気がつかなかったが、意外にも母と同じで、世間体を気にしていることが分かって、麻子は可笑しくなってきた。

外はまだ雨が降っていた。テールランプもネオンサインも、赤いスポットライトのように街いく人々を照らしている。

麻子はコーヒーを飲み終わるとレジに向かい、精算を終えてビルを出た。一瞬、テーブルの横にかけた真赤な傘を思い出して立ち止まったが、そのまま、雨の中を地下鉄の駅に向かって走り出した。

了

『赤い傘』 さとう惇子 著

sakka.org